

# 未来を拓く力を育てる美術科の授業

村田 崇

## 1 美術科において育成すべき資質・能力

中学校は義務教育最後の段階である。中学校で必修教科の美術科は、高等学校等では選択教科になる。いわば、人生の中で美術科の授業を受ける最後の機会になる生徒も多い。しかし、これからこれまで以上にグローバル化していく社会の中で、感性等を育み、日本文化を継承したり、異文化を理解し、多様な人々と協働したりできるようになることが求められている。だからこそ義務教育の最後の段階において、子どもたちに世の中にある美術に関することに目を向けさせ、美術が自分自身とどのような関わりがあるのか実感させることが求められている。

これまでの美術科の目標は一文で示されたが、新学習指導要領では、美術科において育成を目指す資質・能力をより明確にするために（１）「知識及び技能」、（２）「思考力、判断力、表現力等」、（３）「学びに向かう力、人間性等」に整理された。これら（１）、（２）、（３）は相互に関連し合い、一体となって働くことが重要だとも示されている。そして、新学習指導要領（2017. 3）に示された美術科の目標は、次のとおりである。

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- （１）対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことができるようにすること。
- （２）造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにすること。
- （３）美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。

造形的な見方・考え方は、新学習指導要領において以下のように整理されている。

感性や想像力を働かせ、対象や事象を、造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと

また、中学校を卒業した時にどのような資質・能力が身に付き、何ができるようになるのか具体的な姿が示された。それが「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」である。

解説（2017. 3）には、「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」とは、「造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の形や色彩などの造形の要素に着目し、それらによるコミュニケーションを通して、一人一人の生徒が自分との関わりの中で美術や美術文化を捉え、生活や社会と豊かに関わるができるようになるための資質・能力のこと」と示されている。

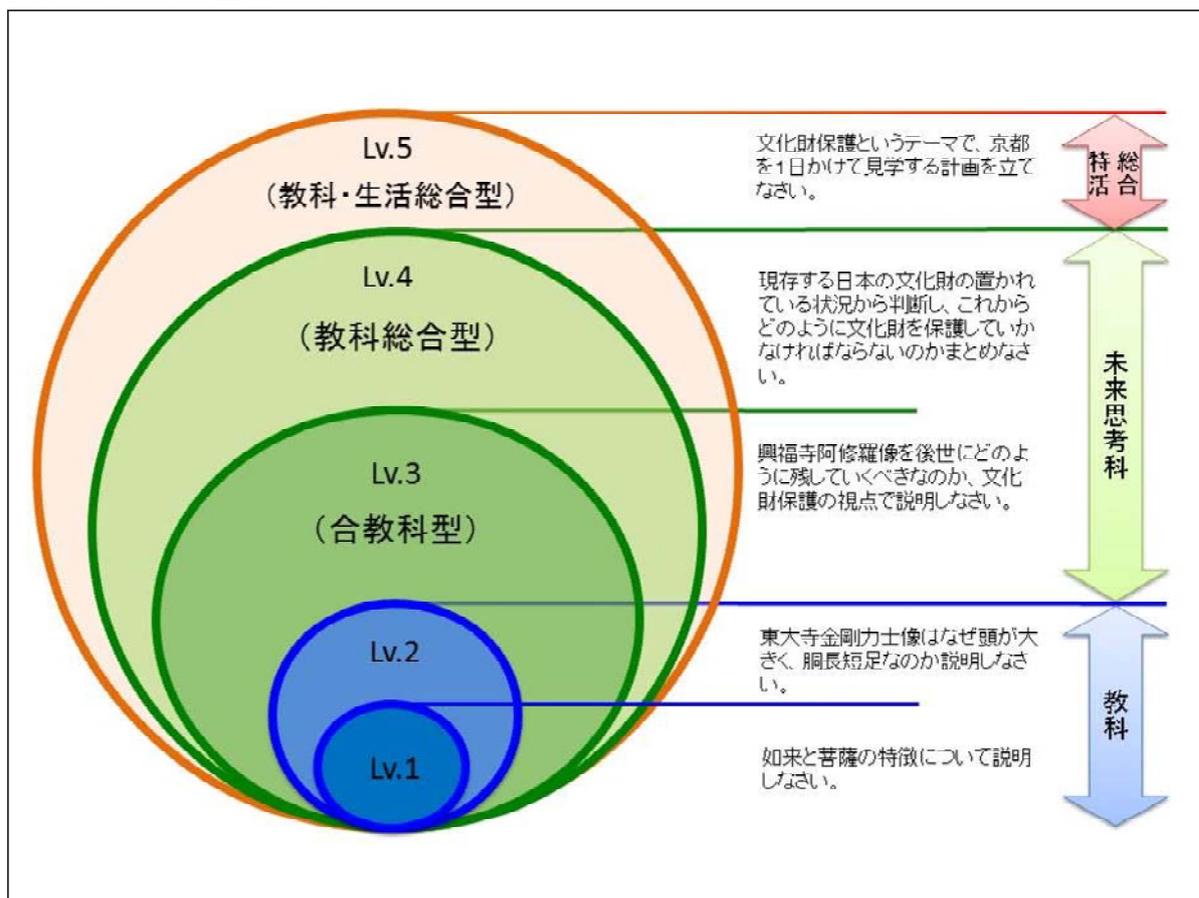
造形的な視点とは「造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりする視点」のことだとも示されている。この造形的な視点とは、美術科ならではの視点であり、教科で育てる資質・能力を支える本質的な役割を果たすものである。

## 2 美術科におけるカリキュラムマネジメント

総合的な学習の時間や特別活動と美術をつなぐ役割にある未来思考科に取り組み、それぞれで扱う学習課題をLv.1～5で整理することで、生徒も教師も美術で身に付けた力が、どのように日常生活や社

会の事象解決するのに生かすことができるのかを意識しやすくなった。

具体的な例として、本校の修学旅行の取組である京都班別自主研修と美術における仏像の鑑賞を【資料1】のように整理した。



【資料1】学習課題レベル「仏像の鑑賞」

私自身の経験で、これまで総合的な学習の時間において修学旅行の班別自主研修の計画を立てさせる上で、生徒の自主性に任せ過ぎて、あまり中身の無い計画を立てる生徒も少なくなかった。また、修学旅行で様々な本物の文化財を見学する際、生徒の興味、関心があまり高くなく、少しだけ見て通り過ぎる光景を多く目にしてきた。

この原因の1つとして、私自身もそうだったが、日本の美術文化の関することを美術の時間にどのように扱ったらいいのかよくわからずに、授業においてあまり扱われることがなかったということが考えられる。しかし、今回学習課題レベルに整理することで、教師は仏像の鑑賞において様々な視点で課題を与えることができることにつながり、そのことで生徒はより多面的に仏像を見ていくことにつながっていく。

本校では、仏像の鑑賞を2年生の修学旅行と関連させて行っている。授業は「知ると楽しい仏像の世界」という共通のタイトルで1時間完結、不定期で4回の鑑賞の授業を修学旅行前に行っている。そして修学旅行後に1時間、これまでの学習と修学旅行で実際に見て感じたことをまとめる仏像鑑賞レポート制作を行い、まとめとしている。仏像の鑑賞の学習内容は次のとおりである。

- ◇如来と菩薩～2つの仏像の比較鑑賞～
- ◇様々な特徴のある仏像の鑑賞
- ◇阿修羅像の鑑賞～文化財保護の視点で～
- ◇金剛力士像の鑑賞～作者たちの表現意図について～
- ◇まとめ～仏像レポートの制作～

学習課題レベル2にあたる東大寺南大門の金剛力士像の鑑賞においては、三十三間堂の同じ慶派が作った像と比較させ、そこから東大寺南大門の像の頭や足の比率がおかしいことに気付かせていった。そして、東大寺南大門の像の大きさと三十三間堂の像の大きさの情報を与え、東大寺南大門の像の方が大きく、見上げるような大きさだということに気付かせる。そして、見上げたと

きにちょうど良いようにあえてつくったことに気付かせ、既習事項のトリックアートと結び付けさせる。実際に教室に大きく印刷した金剛力士像を見上げてみてどのように見えるのか体験させる。本来ならここで、見上げてみたら本当にちょうどよく見えるというような終わり方をするのだが、教室で大きく印刷されたものを見てなかなか実感できなかった。そこにも生徒は気付いていく。「平面と立体では見え方が違う」ということに。そして、この答えは修学旅行本番で実際に本物を見て確認できることを押さえ、修学旅行につなげる。

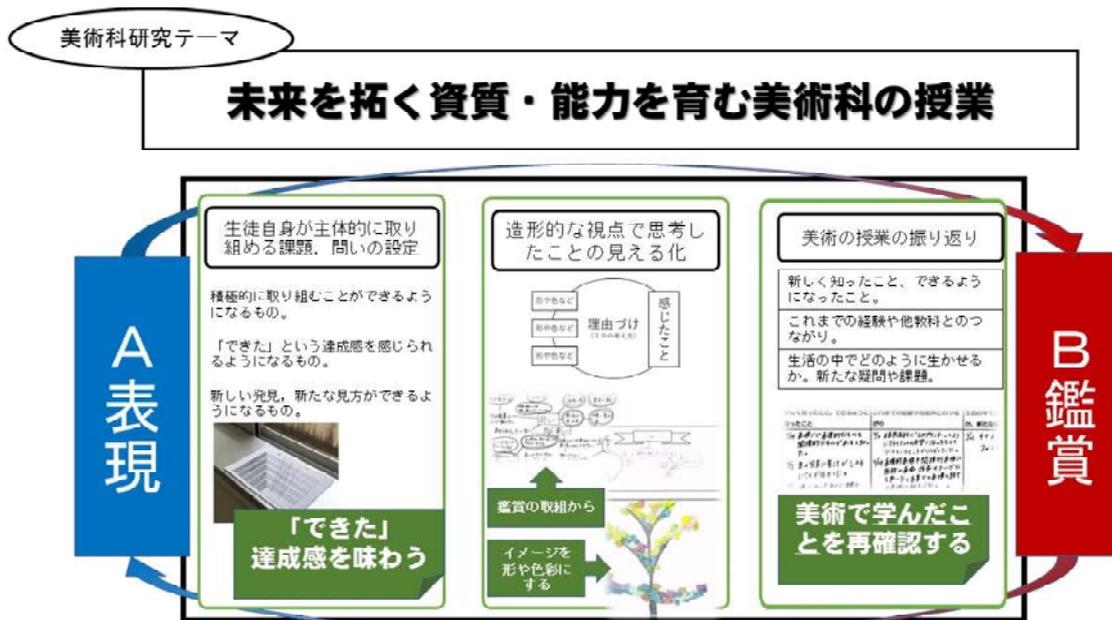
学習課題レベル3にあたる阿修羅像の鑑賞では、奈良国立博物館が中心となり研究され復元された阿修羅像と比較し、1300年の時がたった現在の阿修羅像を鑑賞し、どのようにこの阿修羅像を後世に伝えていくべきなのか考えていくものである。ここでは社会で学習した時代背景や歴史の流れなども加味して考えていく必要があるが、美術で扱う造形的な視点を中心に考えていくものとし、美術の授業で行った。

学習課題レベル4はまだ実施していない課題であるが、今後総合的な学習の時間の質を高めていくために必要な課題であると考えている。

しかし、学習課題レベルで整理し、美術の時間で行うことを明確にし、取り組んだことで、生徒は様々な視点で考え、様々な視点で仏像を鑑賞することができ、修学旅行にもつなげることができた。その成果は後述する。

### 3 未来思考科に取り組んだからこそ見えてきた美術科の授業改善

#### (1) 研究構想図



本校美術科では、表現及び鑑賞のいずれの活動においても作品から受ける印象や対象を見たイメージがどのような形や色などと関連しているのかを生徒自らが考え、生徒同士で意見交換し深めていく活動を随時取り入れている。そこから生徒自身が表現の幅を広げたり、作品に対して新たな価値を見出したりすることが生まれていくと考える。

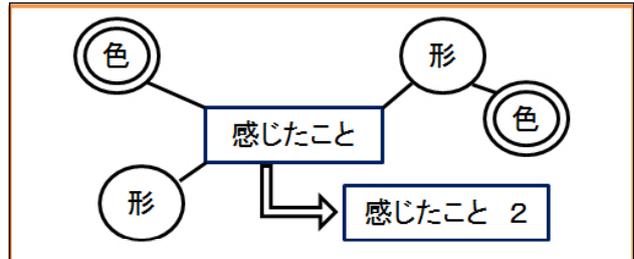
新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。主体的・対話的で深い学びが実践できるためにまずは、生徒一人一人が主体的な考えや意見を持つことの必要性を感じた。そのために、生徒が主体的に取り組めるような課題や問いの設定の工夫を心がけた。生徒が積極的に取り組めるような、意欲を持てるような題材・課題の設定、生徒自ら「できた」と実感できるための支援、生徒自ら「なるほど」と新たな発見ができたり、生徒自ら「そうだったのか」と再確認できるような取り組みの設定を心がけ、授業改善に取り組んで行った。

また、各教科で育成された思考力を束ねて、強化する「未来思考科」の取組において、形や色など視覚的に捉えたものから思考していくときに、造形的な視点で捉え、自分なりに考えを持つことの意味がより明確になり、その重要性を再認識した。形や色などがどのように感情やイメージと結びつき、そのことが他者と共有できるものかどうかという経験は、教科の中では美術科のみが行うものである。美術科でこそ育成できるものがあるということを再確認し、これまで以上に造形的な視点で捉えるということの意義を確認した。

そこで、生徒が造形的な視点でどのように思考しているのかを見取ることができるよう学習指導要領にある〔共通事項〕を可視化することを行っている。それが、鑑賞図とイメージマップである。

### (1) 造形的な視点で思考したことの見える化

授業の中で生徒がどのようなことを考えているのかなか把握することができない。授業後に生徒が書いた感想などからはじめて生徒が考えていたことに気付かされることも多かった。そのような反省から、本校美術科では感じたことと形や色などの関係性を図にした「鑑賞図」の取組を行っている。

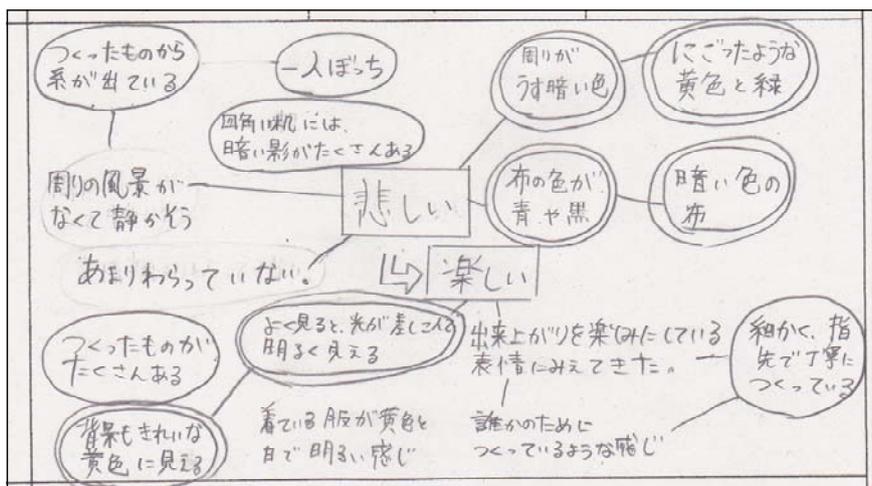


【資料2】鑑賞図の基本形

【資料2】の基本形を生徒に示し、作品を見て感じ取ったことが、作品の中のどの形や色などと関連しているのか整理させる。1年時の初めての鑑賞の授業において、感じたことは四角枠で囲み、作品の中の形は○で、色は◎で囲むなどいくつかの約束事を確認する。他教科においても「図化」でまとめることが行われている。そこで得たことも反映できるように細かな約束事はあえて行わず、生徒自身がわかりやすくまとめることを重視している。特に見たことと感じたことの違いができるように確認していく。

【資料3】はフェルメール作「レースを編む女」を見て書いた鑑賞図である。初めは悲しいという印象を持っていたが、作品の中にたくさんものがあり、それらはつくられたものだとすることに気付いている。そこから、今つくっているものは誰かにつくっているもので、そのできあがりを楽しみにしているのでは？ということ想像している。

これまで自分自身の経験から、一つの作品を一斉に鑑賞するときに、全体的にはたくさんの意見が出て、授業としては活発な授業になっていたのだが、授業後に振り返ると、発表していたのは一部の生徒、内容に深まりがないということが多かった。しかし、鑑賞図を取り入れたことで、授業時間内に全ての生徒がどのように鑑賞しているのか、机間指導の中で瞬時に見ることができるとともに評価することができる。その中でうまく鑑賞できない生徒も判断することができ、指導に生かすこともできるという手ごたえを感じている。



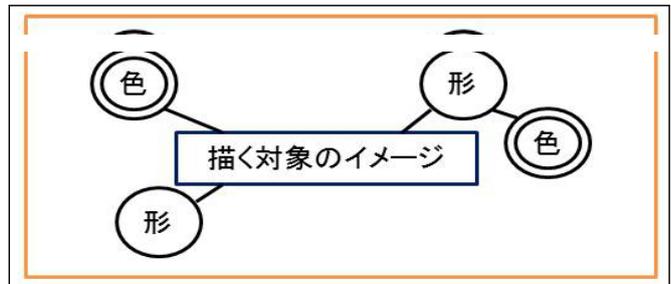
【資料3】生徒の鑑賞図

## (2) 造形的視点で思考したことを関連させた「A表現」と「B鑑賞」相互の活動

今回の学習指導要領の改訂において、中学校美術の具体的な方向性として2点挙げられている。それが、以下のものである。

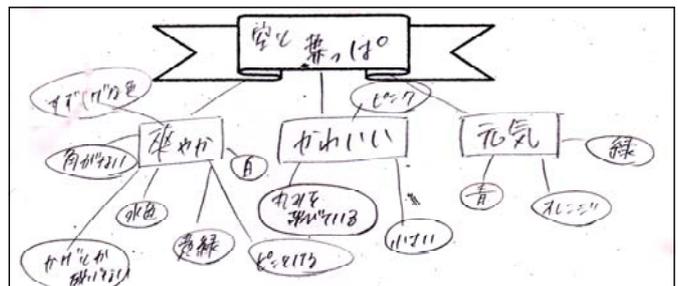
- ・感性や想像力等を働かせて、表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成できるよう、内容の改善を図る。
- ・生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図る。

特に表現したり鑑賞したりする資質・能力を相互に関連させながら育成することは前学習指導要領でも課題とされており、今も課題として挙げられているということは、美術教育において大きな課題の一つということが言える。本校美術科では、造形的視点で思考したことを鑑賞において鑑賞図という形でまとめている。表現においても、描く対象のイメージを生徒がこれまで学習や生活経験から得られている形や色などに置き換え、対象を見ただけの形や色だけではなく、生徒が持つ印象なども作品に反映しやすいような取り組みを行った。



【資料4】イメージマップの基本形

【資料4】は描く対象のイメージと形や色などどのように関連しているのかまとめるためのイメージマップの基本形である。この形は前出の鑑賞図と同じであり、イメージと形と色などがどのように関連しているのかつまり、造形的視点で思考したことを再確認することにつながっている。【資料5】は実際に生徒が、イメージマップにまとめたものである。



【資料5】生徒のイメージマップ

描く対象の「空と葉っぱ」が「爽やか」「かわいい」「元気」という印象を持ち、それらの印象を形や色などに置き換えている。そこには、実際にはない色のオレンジや青などがあり、その後の生徒の制作に生かされることになる。

【資料6】は3年生の風景画である。木が持つそれぞれの形をとらえ、画面に対してバランス良く配置し、光と影の色の変化も良く表現されている。生徒自らより良く表現するにはどのようにすれば良いのか、深く考え表現された作品である。

鑑賞図やイメージマップを鑑賞や表現の活動の軸として取り入れ、そこから様々な課題を与え、取りまさせることによって、更に生徒が主体的に活動できる場ができるのではないだろうか。また、生徒の思考が鑑賞図やイメージマップによって視覚化されることで、生徒が何を考えているのかを教師も評価し易くなり、授業時間内に様々な支援を生徒に行うことにも繋がる。



【資料6】3年生作品

## 4 成果と課題

### (1) 成果

仏像の鑑賞において、ただ仏像についての知識の学習ではなく、学習課題レベルで整理し、造形的な視点で仏像を見て、そこから形の違いの意味や、文化財の修復、つくり手の工夫などについて考えていくことを行った。

仏像はなかなか普段の生活では見るのが少なく、そのため、最初はあまり見たことがない対象で戸惑うこともあったが、何体か見ていくうちに見ることに慣れ、仏像の持つよさや美しさおもしろさにも気付くことができていたようだ。

仏像の鑑賞を行う前の生徒の意欲はかなり低く【資料7】、「仏像を見ることに興味がありますか」の問いに、「おおいにある」「ある」と答えた生徒は2割にも満たなかった。

事後のアンケート【資料8】では、「おおいにある」「ある」と答えた生徒が半数近くになり、「ほとんどない」「全くない」という生徒が4分の1ほどになった。

実際に修学旅行でもじっくりと仏像を見る生徒が目立ち、京都の自主行動では、授業で見た仏像を見に行くコースをとる班が多くあった。中には、京都国立博物館の特別展「国宝」を1時間近く並んでみる生徒の班もあった。生徒の意欲はおおむね向上した。

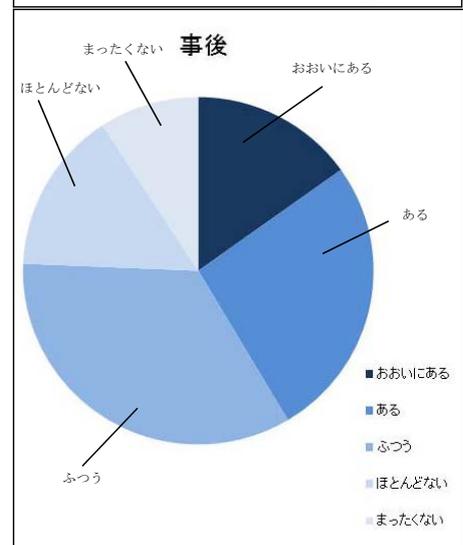
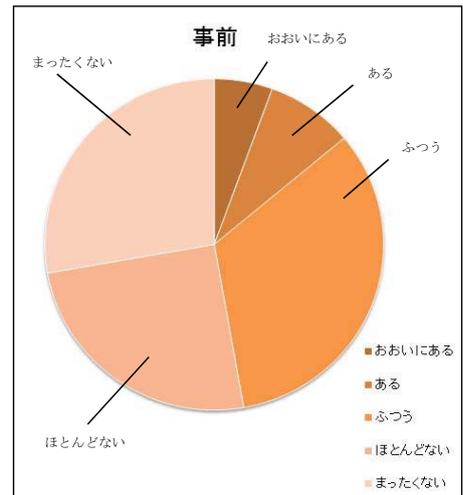
また、未来思考科に取り組むことで、生徒がより質の高い造形的な視点を持つことは、物事を考える幅を広げ、深まりも出てくることに直結していることを再確認した。

造形的な視点とは感じたことと目の前にある対象の形や色などを関連させていくことで、特に難しいことではない。難しいことではないが、普段の生活ではなかなか意識して行うことはない。そこで授業という場でその経験をしていくことでより質の高い造形的な視点が得られると感じた。

だからこそ、造形的な視点を視覚化していく「鑑賞図」「イメージマップ」を取り入れていくことは、教師も常にイメージと形と色の関連を意識すること、鑑賞と表現を相互に関連させること、そして生徒の造形的な視点の幅を広げることに繋がっていくと強く感じられた。

### (2) 課題

これまで、鑑賞を中心に美術文化に触れる活動を多く取り入れてきた。少しずつ生徒の意欲の高まりは感じられるが、まだ、意欲が高まっていない生徒も存在する。また、他教科で知識として美術文化について学んではいるが、そのことが美術で扱った時にすぐに結びつく生徒は少ない。逆に、美術で得た資質・能力を他教科や生徒の生活で活用できているであろうか。教科の枠にとどまるのではなく、生徒自身が活用できる力を教科で培っていかれたらと思う。



【資料8】アンケート（事後）

### 【参考文献】

- 熊本大学教育学部附属中学校（2017）『平成28年度研究紀要「未来を拓く力」を育成する教育課程の開発（3年次）』
- 西岡加名恵（2008）『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（明治図書）
- 文部科学省（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』
- 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 美術編』